

8. 全身性エリテマトーデスにおけるEBウイルス持続感染の検討

(内科学第三)

太原恒一郎, 坪井 紀興,
浦田 幸朋, 竹越 亨,
山田荘太郎, 高梨 博文,
殿塚 典彦, 林 徹

(目的) EBウイルスがSLE患者に及ぼす影響を検討するために、患者末梢血PCR法にてウイルスゲノムの有無を検索し、ウイルス抗体価、臨床背景との関連を検討した。陽性者については、競合的PCR法によりEBウイルスゲノムの定量を行った。

(対象) SLE30人を対象とし、健常人30人をコントロールとした。

(結果) 末梢血PCRで、健常人では陽性1例に対しSLE患者では10例と高率にEBウイルスが検出された。ウイルス陽性とウイルス抗体価及び臓器病変とは相関を認めなかったが、クームステスト陽性であった4例はいずれもEBウイルス陽性で、EBウイルス持続感染とクームステストとの関連が示唆された。また、今回検討し得た2症例では、EBウイルス量はSLE活動期に多い傾向を認めた。

9. 乳児期より膠原病を発病した姉妹例

(小児科学教室, 大月市立中央病院*)

久保嶋慎二, 星 明祥,
田中こずえ, 篠本 雅人,
土田 尚, 岩坪 秀樹,
河島 尚志, 露木 和光*,
武隈 孝治, 星加 明德

姉妹はSLEの母親から出生した第1子と第3子で、5カ月時と8カ月時に各々発熱を主訴として某市立病院を受診、加療を受けた。2児ともに関節炎・蛋白尿を呈し、リウマチ因子陽性のためJRAと診断され、NSAIDにて加療を受けたが改善なくステロイド併用となった。血液学的に赤血球減少・血小板減少・補体(C3, C4, CH50)の低下を認め、抗ds-DNA抗体が経過中に陽性となりSLEの診断基準を満たした。姉妹の臨床経過・及び検査所見は類似していた。第1子は4歳時、16回目入院の際、消化管出血・DICにて死亡した。第3子は現在当院で入院加療中である。家族歴では、母親は13歳で発症したSLEで、健康な第2子(現在5歳)を含め全ての妊娠中ステロイドを服用していた。

若年でのSLEにおいて、遺伝的素因とSLE活動性、妊娠中のステロイド服用等が発症に深く関与すると考えられた。

特別講演

ネオプテリンとその臨床応用

東京医科大学内科第一講座、八王子医療センター免疫血液内科 若杉和倫

ネオプテリン、ビオプテリンはプテリジン化合物に属している。プテリジン類は、初め昆虫や下等脊椎動物の色素としてみられましたが、高フェニールアラニン血症、悪性疾患、炎症性疾患等の患者さんにて、体液中のネオプテリン濃度の上昇が報告され、それ以降、ネオプテリン濃度と各種疾患の予後、活動性との間に正の相関があるという報告が増加し、現在もまだ、このような報告が続いています。そこでこのネオプテリンにfocusを合わせて生合成、測定方法、測定による臨床的意義；プテリン代謝の先天性欠損、ウイルス感染、自己免疫性疾患、GVH、悪性疾患のモニタリングマーカー等々の関与について、また簡単にネオプテリンを御紹介してみたい。